

# 内湾性臨海養殖村の地理学的研究

— 豊橋西郊地域の場合一 —

榑 原 康 人

## 目 次

序 論	c. 養殖業者の分析
I 養殖業と圏域性を持つた農村類型	II 前芝型養殖村の構造
II 神野新田型養殖村の構造	III 内陸養殖村の構造
a. 新田に於ける二つの集団	V 結論
b. 海苔養殖農家の分析	

## 序 論

現在の吾々の生活圏或は生活手段の中には徳川末期の諸藩の産業奨励、土地開発に基因するものが多い。表日本内湾臨海村に於ける海苔養殖業、干拓新田は多くこの例である。かかる類型の村落は海岸線を境にして土地生産力の増大、養殖業に依る換金副業の拡大と云う二面的伸展に努力して来ている。かくして形成された農村は自然的災害を征服して経済的發展をして来ているが、此れを支える地理的要因は実に労働の季節性にあると云つても過言でない。かかる地域の標式として豊橋西郊地域の二、三の部落を intensive に調査しようとしたのが本論文である。しかるに昭和28年9月25日の台風13号に依り調査研究も不充分、特に海苔場の政治地理学的考察或は近世以降の動態的研究（歴史的变化）に欠ける所があり遺憾であるが後日研究報告する事にして静態的研究の一端を報告し御教示と叱正を仰ぐ次第である。

〔1〕 養殖業と圏域性を持つた農村類型。

三河湾に於ける海苔養殖の核心地域は豊川河口、渥美郡福江湾、幡豆郡地先で、昭和27年度生産124,963,524枚の49%、金額にして51%が豊橋西郊地域より生産されている。そして幡豆地先が青、混海苔中心であるに比して本地域前芝に於ては70%、牟呂六条湾に於ては86%が黒海苔であり、又愛知、三重両県への種ヒビの供給地である事は、名実共に三河湾に於ける海苔養殖の核心地帯であることを物語る。

淡水養魚に於ては5万分の1地形図でも明らかであるが、その分布は大小干拓新田の汐遊びを中心に新田内に分布している。牟呂養鰻組合に属する(昭和27年)29戸約72町の生産高は171,000貫2億2399万円で三河湾の84%を占めている。本地域に於ては、神野、明治富久縞、青竹、吉前新田等に分布し三河湾の90%以上を占める事は事実で淡水魚養殖に於ても三河湾の核心地域で浜名湖畔養殖村に次いで有名である。

(2)

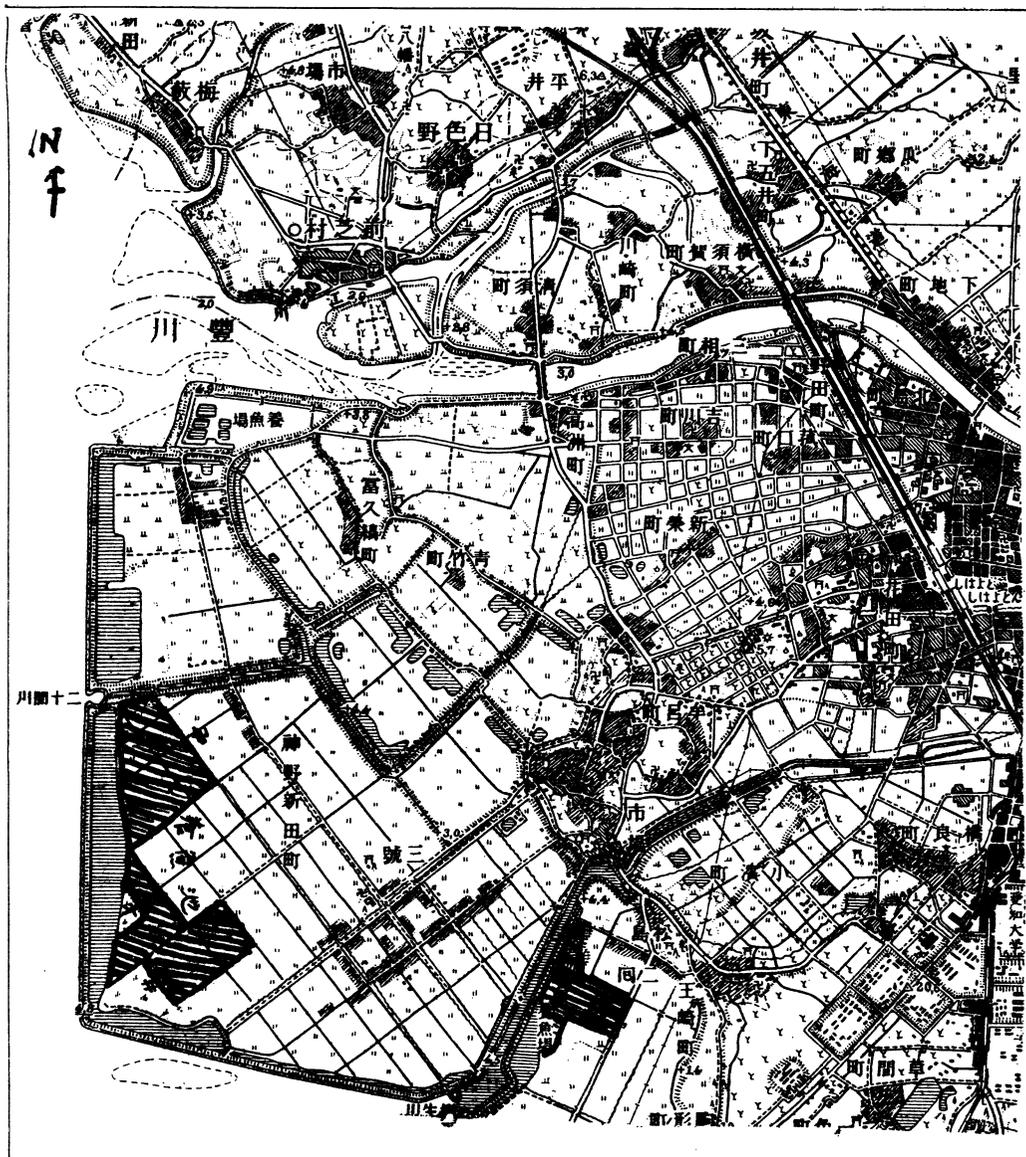
本地域は畑を基調とした隣接の所謂渥美半島型農業と対比的に水田率60%~95%然も裏作率の低い<sup>(1)</sup>低湿な水稻中心の新田地域であつて豊川左岸に於ては農業指標(農戸率、経営耕地、家族労働力、役牛率等)と水産養殖兼業を以て統計処理し考察すると都市(豊橋市)吸引力と逆比的に海岸よりの距離に従つて圏域性を呈示する。

第1圏(海岸より1km以内)

経営耕地11反以上(五号部落20反以上)農戸率90%以上役牛率90%以上(新田北50%)海苔養殖兼業率90%以上(二回部落は漁業権がない)で農業、養殖業の最も盛大な地域で神野新田、富久縞新田が此れに属する。尙豊川右岸前芝村はこの圏域であるが新田ではなく別の類型で後述する。

第2圏(海岸より2Km以内)

第1図 神野新田(5万分1)



清州，川崎，高州，青竹部落があり耕地8反～11反，農戸率80%，役牛率40～80%，養殖兼業率80%で第1圏に次いで盛大な地域である。

第3圏 (海岸より3Km以内)

前2圏が18世紀以後の干拓新田であるに比して第3圏はそれ以前の<sup>(3)</sup>新田或は旧陸地であり，一戸当耕地6～9反，役牛率32～66%，又農戸率が36～90%で，しかも養殖兼業率は67%以下である。土地の零細化と都市隣接地域として都市力を受け下層農家の通勤農家型が多く現われて来ている。牟呂町坂津，大西，中村，公文，東脇，旧吉田村馬見塚，三つ相，吉川町が此れに属し，この圏域を超えると海苔養殖農家が消滅する。(勿論この圏内に於ても専業漁業者の集団は例外で，別の角度から考察しなければならない。)

かかる圏域からして三つの農村類型が考えられる。即ち第1圏に於ける神野新田型，前芝型，第3圏の

内陸型である。今新田五号，前芝村，前芝1区，牟呂町公文部落をその典型地域と考え，新田を中心に他を対比的に分析する。

### 〔II〕 神野新田型養殖村の構造

総面積1100町歩のこの干拓新田は明治29年神野金之助氏に依つて形成された。他の新田の多くが藩官営に依るに比し民間私人の経営であつた。農業経営に始まり浅海養殖を副業化し，他方淡水魚養殖を内在する本地域は人文現象に於ける人間側の因子として二つの社会集団を見出す。

#### (a) 新田に於ける二つの集団

入植民はその生業から二つの類型を見出す。即ち主農副海苔養殖民と養鰻企業家である。後述する五号部落やユ・オの割の調査(昭・28.8.)からして第一次産業者は昭和9年の新田小作人名簿のそれと殆んど合致すると考えられる。これに依れば前者は明治末期から大正中期，後者は昭和初期，特に10年の神野養魚株式会社解散を契機としてその大部分が入植している。今その母村を見ると左図の如くである。

第2図 神野新田入植農漁民の母村(・農民 ×養魚民)



即ちその母村は「神野新田」にも書かれている如く。前者に於ては①木曾川下流地域②牟呂・田原・仁崎それに③幡豆や伊勢湾沿岸村に多く，創業者の故郷としての①，近接移動としての②，同じ生活様式としての③の分布現象が推察される。又後者は第4表にも明らかな如く静岡県浜名湖畔の養殖村の出村である。又この集団は勿論個人経営もあるが共同，仲間経営の多いの

も特色である。そしてこの二つの集団の共通点は入植してから所謂分家に依る同族集団が多く派生している事である。五号部落農戸53戸の中21戸が分家である事はこの事情を物語っていると云えよう。又嘗々今日の盛業を見るに至つたのは新田経営，土地経営の方策がよかつた面もあるが，彼等がその職業の経験者であつた事は見逃す事は出来ない。即ち養鰻業者は勿論の事海苔養殖農民も五号部落に於てはその前職は天然養魚の番人，舟乗，人力車夫の3名を除けば農民或は農漁民であつた。この二つの集団は別個の存在であるが新田を通し，土地を媒介として過去に於ては経営者，今日に於ては土地農業協同組合と結びつき，同じ地域居住者として地的統一をしている訳である。その一つの集団内に於ても又二つの集団の間に於ても *Gesellschaft*, *Gemeinschaft* の両面的性格を内在している。

#### (b) 海苔養殖農家の分析

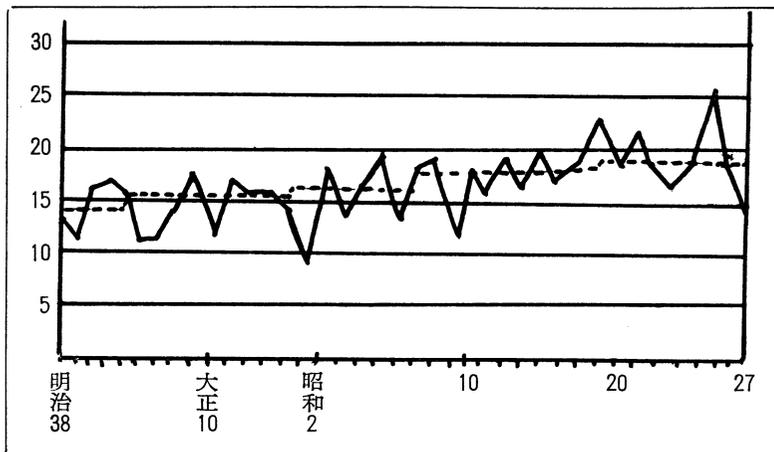
農家分析を行う場合，その地域の農業形態，養殖状況，並にその発展過程を見なければならない。

##### (イ) 農業発展と養殖業

本地域に於ける農戸率95% 海苔養殖兼業率97%(二回部落を除く)一戸当経営耕地一町以上，五号部落の如きは2町以上の大農家群である。然るに干拓新田で低湿な為め裏作は不良で専ら水稻中心の水田地帯である，その上砂質土壤の不良耕土であるので創業以来反当収量の向上に意を用いて来た。そのなされて来た状況は①耕地整理②自給肥料の投下による地力保持③畜力，機械化に依る生産合理化④共同苗代に依る品種改良⑤塩害排除等であるが最も大切なのは②③である。新田に於ては干拓地であろうと，洪積台地であろうと一般には瘠薄な土地である為，地力の保持拡大には自給肥料の投下は最も重要な事である。安城原に於ては岡崎の塵埃投入した如く，此の新田に於ては緑肥，海草と

(5) 同時に高師原15師団の軍馬の厩肥を此れに当てて来た。戦後は軍隊の崩解に依り又役牛率50~80%の保持を来し畜力の有効な利用として労働力と共に、ここから得られる厩肥を中心として堆肥を作成している。そして二毛作期に反当350貫を投入している。又機械力の導入は主に脱穀調整で昭和16年に電化され、掘起し、中耕除草は畜力に依っている。これを有効化しているのは経営耕地の広大性は勿論、二回部落の一筆2反、三・五号部落の一筆3反と云う耕地面積である。今その生産増大の過程を見ると第3図の如くで明治38年の13斗2升(反当)から10年平均14斗3升, 15斗1升, 15斗5升, 17斗9升戦後の18斗5

第3図 反当収量と平均数量(-----)



升と5斗以上の増大を見た。然るに土地開放以前は小作人で所有関係が自作農になる迄は勿論掬米に制約され後述する農家経済に大きく響いていた。現在(昭・28.8.1)五号部落では53戸中自作36戸, 貸付自小作1戸, 自小作16戸で小作農はない。この内, 小作地は90%以上畑である。即ち低温な新田内にある畑は30~50cmの盛土に依るか宅地の一部で

(6) 2km圏内の富嶺部落に通勤耕作をしている。即ち田, 畑の一方が欠ける時は通勤耕作性のある層は武州金沢柴村の例と同じである。土地利用の面に於ては, 干拓新田に於ける自然災害としての低湿性上裏作率は75%とは云え高畦を形成しているので収量は低い。27年度の作付面積と粗収入の関係は第1表の

第1表 神野新田(27年度)農業作付並粗収入

	稲	麦		菜種	甘藷	馬鈴薯	計
		田	畑				
作付面積	535町	250町	30町	100町	30	50	
粗収入	7966石	1400石	3500	105000	99500	8216	万円

如くで表作の水稻, 陸稻, 裏作の菜種, 馬鈴薯, が中心作物である。裏作では菜種の商品価値が大きいので麦作は粗収入に於て圧倒される。

一方養殖業は前芝村の隣接刺戟(7)を受けつつ明治25年牟呂村村長芳賀氏に依り始められた(8)29年には60

戸 大正, 昭和にはこれ等沿岸村に普及したのは①立地条件の優位性, ②冬期農閑余業としても又商品価値も高い事③指導者の熱意と指導販売機関の完備がこれを促進し又生産過程の簡単さと家内産業として行なえることは有利な条件であつた。以上の理由から此の地域に於ける最も有利な換金副業であつた事は大正年代に於ける掬米40~50%昭和年代30~40%に対し海苔については昭和初期の不況時代に於て牟呂漁協内一戸当10158枚(昭和四年)14483枚(昭和13年)米に換算して10俵程度であり米作の $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{4}$ の経済価値のあつた事が物語っている。それ故海苔養殖を兼業しないのは特殊事情例えば五号部落に於ては菓子製造業, 舟製造業を兼業する農家のみである。勿論病人が出て労働不足で一年乃至二年休業するものは例外である。それ故海苔ヒビ建場の位置と面積は重要な存在となり, 奈切・五ヶ村・熊川・三ヶ村界・新場新々場・川中・六条潟の貸付場, 甲・乙・丙・250間・種付場の場割は牟呂・吉田方・前芝・梅敷・伊奈・平井の各漁業組合単位で毎年決定がなされ配分率も決定されている(前芝村海苔会社内東三海苔振興会の管理下で徳川末の蛤運上や軒敷に依つて決定されて来たが古来此れを廻つて紛争が絶えない。この事については報告の段階に来ていないから省略する)。毎年輪転移動をしている。又一部落内に於ても, この事が行われるので養殖戸一戸の位置は二重輪転移動をし位置の

公平化を計っている。又一戸当の場の零細化を防ぐ為め新加入の制限を組合に於て行っている。現在はその技術上網ヒビを多く使用し27年度平均ヒビ数は粗朶ヒビにして322株程度である。

(ロ) 農家経済と労働力

かかる農業基盤と養殖副業から来る農家経済は豊川川口臨海村に於ては富農地域である。今此の地域の27年度所得は第2表の如くで総所得に於て一戸当新田に於て20万、五号部落の24万は近接町村に比

第2表 豊川川口地域一戸当所得(農, 養殖)昭和27年

	農 業	水産養殖	総 所 得	水産比
大 崎 町	129,121円	17,121円	146,904円	13%
神野新田町	179,090	18,427	197,527	10
新田五号	221,801	16,958	238,759	7
前 芝 村	64,022	39,087	103,109	61
字 梅 薮	79,904	65,229	144,133	82

し非常に大きい、然るに養殖収入が農業収入の10%以下、前芝村60~80%に比して少いのは、とりも直さず一戸当耕地の広大性にあるからである。統計から来る養殖収入の2万~2.4万は実に少く、この地域中流農家の農家簿記(25年度)の収支を整理してみると養殖粗収入は5.2万円、所得3.2万円、収入比率14%である。然もこの農家は4.5月の青海苔を採集してい

第3表 某農家の収支 26年度

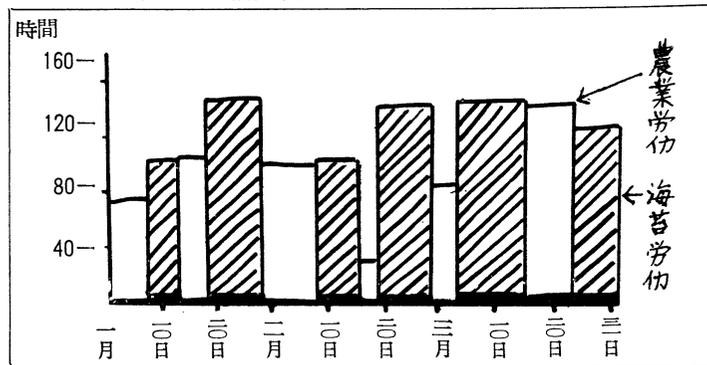
収 入				
米 麦	その他	海 苔	畜 産	雑
258,700円	59,396円	51,833円	10,496	4,200
67%	15%	14%	13%	1%
支 出				特別支出
農業経営費	副業費	生活費	諸税金	建築費
126,605円	20,907円	121,294円	79,294円	212,986円
34%	11%	33%	22%	

ない事実から一般に口開日普通に行えば平均4万~5万はある(此の事は原価計算からも云い得る)又三好<sup>(9)</sup>氏の分析では此れ以上で統計に出ない数を換算すれば2倍程度であると云つて居られる。第3表にも明らか如く農家経済の収支は特別支出の建築費を除けば赤字を除かれ昭和25年の生活費が約12.2万円、その家屋や水道設備を中心とした農村

景観がかつての入植農民として近隣から白眼視されたのと比較し、合理化された生活水準の高い農村を顕示している。そのうえ夏と冬の景観の相違は顕著で、その主農副業、夏冬生業中心の転位性は労働構造即ち労働の季節性に依つて支えられている。労力単位は男子より女子の方が大きく2町以下では3.3人 2~2.3町、4.2人 2.5町~3町、4.8人3町以上5.8人で雇傭労働力は一週間以内に終る田植労働と脱穀調整共同機械の使用に依る結労働で極めて少い。そして家族労働と畜力、機械力に多く頼っている。それ故子弟の出稼は冬期新田内の護岸工事程度であり離村者は取るに足らぬ数である。昭和26年L農家(耕地約2.4町)の労働単位と配分は次の如くである。男子2人 女子2人年間農業労働1456時間その中ピークは6.7.8月の田植中耕除草期の39%11.12月の二毛作期の25%でこの両期に全体の64%を要求している。此の事は役牛の出没日数、労働日数とも、ほぼ合致する傾向である。特に7月始めを中心とした田植労働は、人間に依らねばならないので一日10~15日間の強労働となる。そして8月の労働は中耕除草で畜力除草機に依る。此れは一筆2~3反である為、又除草機が一度に3列出来る事から畜力が使用され、非常に有効で反当一回一時間程度で行える。然るに28年は2.4D散布<sup>(10)</sup>に依り8月の労働は極端に短縮されて来た。此の事は25年三好氏の分析では田植準備から穂肥迄47時間内中耕除草23.28時間に比し23年三輪氏(新田居住者)の分析では32時間、6.2時間と短縮されている事は耕地面積の広大な地域に於ける農業労働の革命である。更にかかる農村を支持している重要な労働構造は、水稻を中心とした夏期労働と海苔を中心とした冬期労働(9.11.12.1.2.3.4.5.6月)が季節的に配分され、一ヶ月労働の恒常化が見られる事である。(7月と11月は少し過労働であるが)

又冬期に於ては更に大潮時に海苔労働力潮時に農業労働の交代性が見られる。即ち第4図は此の事情を説明するもので労働の中心が週期的に動いている。然るに1.2.3月の農業労働は209.5時間、127時間、181時間に比し海苔労働225時間、230時間、259時間となり中心労働は、やはり冬期に於ては養殖業に移動している。本地域の養殖農家を支えているのは畜力、機械力、農業と云つた近代農具と家族労働を中心とした労働の季節的交代性にあと考えられる。

第4図 冬期労働の交代小性A農家の簿記分析



(c) 養鰻業者の分析

三河湾沿岸干拓新田を5万分の1地形図で見れば明らかであるように干拓新田には汐遊びが必ず形成され、この利用として天然養魚(無飼料)業が始められ、それに対して耕地整理上土砂、採取跡に人工養魚業が創業されて来ている本地域に於て

は新田形成第一次耕地整理を契に神野三郎、奥村八三郎氏に依り創業された。これが浜名湖畔よりの移住者に渡り拡大したのは前述の昭和9年の神野養魚株式会社の解散時からである。地下水を中心とした自然立地条件、飼料交通を中心とした社会的立地条件の優位性に就いては先学の研究があるので省略する。新田内に於ける分布は二回部落と三号部落汐遊び附近のユ・オ・井の割地区である以下ユ・オ・の割に於ける実態調査を中心に記述する。

(イ) 経営者の分析

ユ・オの割17戸の調査結果は第4表に示した。

第4表 ユ・オ割地区養鰻業者の実態(昭和28年8月1日)

養鰻池名	創業年次	前住地	前職	経営面積	種子購入地	雇傭人夫	給水ポンプ	農耕地	備考
A	S 3	LH	Y	1.2町	M	0	2台	3反	
B	S初	LH	Y	1.4	M	0	2	3	
C	S初	LH	Y	3.5	M	1	3	0	
D	S 8	新城	農	4.2	M	1	4	4	雇傭者より創業 ※
E	T 15	LH	Y	3.2	M	0	3	2	
F	S 24	LH	Y	2.8	M	0	2	0	分家 ※
G	T末	LH	公吏	1.2	M	0	2	0	
H	T 10	牟呂	農Y	4.2	M	1	4	2.5	
I	S 12	A	Y	2.3	M	0	3	0	Aの長男
J	S 10	C	Y	2.0	M	0	2	2	Cの雇傭者創業
K	S 10	N	Y	2.0	M	0	2	5	
L	T末	牟呂	農Y	2.0	M	0	2	3.5	
M	S 15	牟呂	Y	2.0	M	0	2	4	分家 ※
N	S 13	LH	Y	3.5	M	0	4	0	
O	—	B	Y	3.4	M	0	—	—	Bの分家
P	—	LH	Y	2.0	M	0	—	—	
Q	—	LH	Y	2.0	M	0	—	—	
備考	S昭和 T大正	LH浜名 湖沿岸	Y養鰻		M舞阪				※印は二回部落の養魚者

現在経営者の創業は前述の如くその大半は昭和初期10年前後である。又前住地即ち母村に第2図と合わせ考え浜名養魚の枝村と云えよう。その多くは東岸の神久呂村宇踏で他に舞坂町篠原村が之に次ぐ。その他は経営が技術に負う所が大きいので分家した者或は雇傭労働者として経験し独立したものである。(備考の欄参照) この事が農家とその経済上優位な養鰻業者に転換出来ない理由の一つで、この

経営には技術と資本が重要な要素である事がわかる。そうであるから彼等の前職も同業者或は雇傭労働者或は近隣在住の経験者であることがうなづける。二回部落の⑩=養魚の12町歩は例外として、その経営面積は2~3町で決して広くはない。それ故雇傭労働者も投餌・採魚の労働が軌道や結労働で行われる関係上非常に少い。然し水中酸素の供給ポンプに依る地下水補給であり、見廻は昼夜を分たぬ故経営者は不眠の労働ともなる。農耕地との関係が出て来たが此れは戦争中の飼料不足と労働力不足から中止され農家から土地を借用して零細農家と成つていたが農地解放に依り獲得したもので、現在多くは田植、収穫以外は管理を他の農家に依頼している。又戦後の回復は三号地先では塩分の為<sup>(14)</sup>蓮池化しなかつた事が二回部落のそれに比して回復度が高く戦前の70%以上である。此の事は浜名湖畔の回復度と比較して興味のある実態である。

(ロ) 経営経済構造

鰻の飼育は3月末から11月迄行われ、12月~3月に残魚の整理、池の修理をする。飼料はいわし、法華魚、蛹で遠く裏日本、北海道から購入するが第4表の如く種子は舞坂より購入し5匁~10匁のものを30匁~65匁にして出す、そして土用牛の7月を中心に労働、販売が集約される事は勿論である。販売は牟呂用水沿いの地元問屋を通して行われ、その資金の回収に安定性を持たせている。粗収入は昭和27年の2.2億円は面積の7倍もある農業の粗収入約1億円に比較すればかなり高い。然るに設備、飼料種子代等からくる経営費も高くその技術、資金からして共同経営が多く、昭和28年には23戸65%に及んでいる。

〔Ⅱ〕 前芝型養殖村の構造

水産養殖業は近隣町村以上に盛大であるが、農耕地は零細で近世以降豊川舟運の基地であり新田とは異つた半農半漁村である。<sup>(15)</sup>

本地域は三河海苔の創業地で江戸末期の浅草海苔が海苔商人を媒介として伝播した影響を受けたものである。海苔発起帳に依れば<sup>(16)</sup>李野甚七氏に依り嘉永六年着目、安政元年舞坂にて研究、安政四年六貫採集し企業の見通が出来た。この年12月6日吉田松平伊豆守に150枚献上し、海苔仲間21人であつた。安政五年142人同六年近接下佐脇村、御馬村、文久元治年間には伊奈、平井村に拡大している。此れは現在の豊川右岸の範囲に一致している。<sup>(17)</sup>慶応三年旧前芝村海苔仲間84軒生産高1260両一戸当15両(米15俵分)とあり此の時代迄にかなりの浸透度を見せたのである。此れ以後は記録を見出せぬが古老の言や前芝漁業、東三海苔振興会の生産台帳から総合すれば新田と同じく殆どの農家が兼業している。現在は93%で新田と異なるのは第二、第三次産業者の中にも養殖を兼業している事でこの多くは拾い海苔の形式である。

一方農業は一戸当耕地前芝3.7反、梅鋸5.2反、日色野7.3反で非常に零細である。その上裏作率低く水田率60%では当然創業以来積極的に水産養殖に発展したのである。更に農業条件の悪いのは所有関係で、自作の58%に比し小自作の8%、小作の7.8%を数える事である。それ故海苔場は良好であるにも拘わらず場割を廻つて論争の絶えないのは六条潟以上である。その最も顕著であつたのは幕末の篋<sup>(18)</sup>笠騒動と呼ばれるものである。かかる地域の農家の経済構造は次の第五表が端的に物語っている。即ち農業所得と水産所得が相半する事である。(実質は統計より養殖収入の点に於て多い事を認める)一般に養殖規模は農業規模に比例しているがその資金として生産高の半ばを囲い海苔として8.9.10月の端境期に出荷する様式を持つている。尙一家の家族員数は平均7人所得に於て神野新田の $\frac{1}{2}$ 程度では生活が保障されず所得形

第5表 前芝1区平均所得(27年)

農 業	海 苔	あ さ り	計
69,526円	33,231円	10,132円	112,889円
61%	30%	9%	100%

式の多様性を見るのである。即ち前芝一区での調査では55戸の中35戸の農漁戸、5戸の水産戸と15戸の第二、第三次産業者の集団であるが、この中の40戸の第一次産業者の中18戸(50%)は給与所得者を内在し7戸は砂利採取を兼業し2戸は商店、1戸は建干業を行つている。ここに土地と海苔場の限界性を見出すのであつて、二、三男の離村、子女の織布工場への転住となり、分家も土地を配分されず他産業へ転職して地内に居住するのは神野新田とは全く異つた pattern と云わねばならない。それ故本籍人口は現住人口より420人多く人口流動は年間10%、その中生産戸(農戸)が42%を占める結果を将来している。

### 〔Ⅲ〕内陸養殖村の構造

第Ⅲ圏の標式で都市から3km、海岸から3km圏にあり、都市力と水産養殖兼業の力が両方働きかけられた農村で、地内に30%以上の第二、第三次産業者を包含している。牟呂町公文は此の例で耕地面積は前芝村よりは大きく7.1反であるが水産養殖を兼業する農家と通勤農家が分離して来ている。即ち上層農家は家族労働を内在しているので冬期の農閑余業として海苔養殖を行ない、零細農家はそれ自体では生活出来ず漁業権はあつても資本関係と相俟つて通勤農家化して来たと考えられる。即ち3反~5反の農家にあつては水産養殖戸24%、通勤戸63%、然るに1町以上の農家に於ては養殖兼業戸60%、通勤戸21%である。又通勤者の類型も当然の事ながら零細農に於ては世帯主、長男、上層農に於ては二、三男更に女子と云う性格のあるのは論を俟たない。

### 〔Ⅴ〕結 論

- (1) 三河湾養殖業の核心地帯としての本地域の人文現象は、その養殖業の度合、農業経営度合、都市力に依つて一般に海岸より都市に向けて、その養殖村的色彩を減退し圏域性を見る。
- (2) この観点に立つ時に二つの異なつた集団が農業と水産養殖、鰻養殖と云う別個の生業に従事して地的統一をしている神野新田型臨海村と半農半漁の生活限界に達した前芝型臨海村と都市力を受け養殖農村の崩解を来たし通勤養殖農村化しつつある内陸型養殖村の三つの type を見る事が出来る。
- (3) 然し如何なる type に於ても農業経営の広大な為水産養殖が零細化すると云う事がないのは実に労働の季節的配分にあり、反つて此れが資本と関係して比例し農耕地の広い程水産養殖規模も大きい。
- (4) それ故此の地域に於ける農家階層は耕地所有度とヒビ場ヒビ建数によると云つても過言でない。
- (5) 養鰻業は干拓新田の有効な利用であつて資本と技術上他から転職されない別個の存在であり異質的企業である。
- (6) 以上要するに養殖業を特色とする内湾臨海村の性格を維持し更に経済発展を期待する原動力は労働の季節性にあると考えられる。そして養殖村の景観、生産様式はその本質からして農村的色彩が強いのである。尙本論文は昭和28年度愛知学大卒業論文の一部である事を附記する。

註 第2図 昭和9年神野新田小作人名簿  
(神野新田土地農業組合蔵)

第3図 酒井正三郎、小出保治著 神野新田  
昭和27年生産合帳 神野新田農協

第4図 昭和26年 神野新田五号部落某農家簿記

第1表 神野新田農協調べ

第2表 豊橋税務署調べ

第3表 神野新田某農家簿記調べ

第4表 聴取調査 昭和28年8月

第5表 前芝村役場調べ

註1 豊橋市役所農務課調べ 昭和28年7月1日

註2 伊藤郷平 日本農業の労働構造の地理学的研究  
(地理学報告第2号1953年)

註3 酒井正三郎、小出保治、神野新田

註4 伊藤郷平 日本デンマーク農業の形成と労働  
構造(地理学報告第3号1953年)

註5 註3に同じ

註6 田中啓爾著 地理学の本質と原理

註7,8 牟呂漁業組合 三河海苔と芳賀保治翁

註9,10 三好四郎著 戦後日本農業の実態分析

註11 三輪氏(新田二回部落居住者) Project  
農業調査 上巻

註12 酒井正三郎 小出保治著 神野新田

註13 愛知県地誌

註14 井出栄二 浜名湖畔の養魚(新地理)

註15 殖田三郎著 海苔養殖読本

註16,18 前芝村山野忠義氏 所蔵

註17,18 前芝漁協 三河海苔由来記

註19 青野寿郎著 漁村水産地理学研究第一集